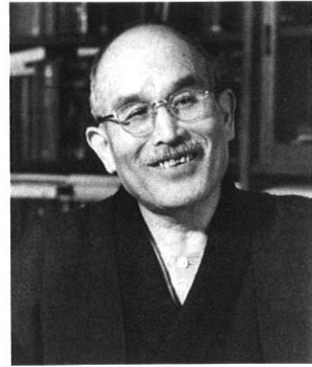


汲古一心

『祭墨一言』



中村素堂先生

わが貞香会が、大正十二年（一九二三）に創められて五年目となった時、何か記念の行事をと考えて、唐の大詩人・賈島の祭詩の故事に倣って、祭墨と称するささやかな催しを起こした。

これは一年中に消費した筆・紙・紙織に感謝し、反省とさしに文運を祈るお祭り、あわせて書初会もやるといったものであった。本来は祭墨は歳末に書初は年首に行う建て前であったのを、年末年始の最も多端の時期に接近して二度の集会はいかがと考へ、祭墨は午前、直会（神事が終つて、神酒をおろしていただく酒宴・午餐（ひるめし）、午後は書初めの式と余興というのがしきたりであった。

昭和の初めころのことで、朝日新聞などがなかなか珍しい催しだと紹介してくれたりしたが、浦和市の調神社でやっていたのを、第七回目から東京へ移して、そのころの官幣大社日枝神社の宮司さんが神事をして下さった。戦後は、当時日枝神社に任えていられた神官の内海先生が、今、世襲のお宮・根津神社宮司をしていられるので、四十年もの古いご縁にすがつて、この老宮司を煩している。

今、貞香会も五十年を数え、祭墨会も四十五回に達し、書道界でも少々老舗と見られているようで、この道に携わっている人、これに大変造詣を深めて人生唯一のたのしみとしている人、これを修養のひとつのようにして精進を重ねてきた人々が増えて、グループ別研究会の名において、研究集会をしたり、作品発表の活発な運動も展開されるようになってきた。

機が熟したのか、しぜんこの各グループが、最低年一回ぐらいいは一同に会し、これに心を寄せる学生その他の人々にも出品していただいで、ひとつの新しい書作展を開催したら——との意見がまと

まり、既往に地味ながらほこの構想でやってきた第七回までの貞香会展を拡大し、半公募のものにするようになって、今年の春、内容も充実してきた第八回展を上野の森美術館に持つことができた。機はおのずからの発展を促して、今度はこの会のための血液ともいべき機関誌を出したいとの運営担当諸君の提案は、ここにこの一冊子を送り出すことになったのである。

そこで誌名は如何、と問われ答えるように、既往を反省して新しい文運を祈ってきた祭典の名を、そのまま誌名とすることにした。実は前述の式事を創める時に、私の恩師、武田霞洞先生（一八六五—一九三五）にお話し申したところ、先生は「祭墨」とは実はい名である、大変お賞めをいただき、慶大教授で宮内省ご用掛でもあった詩人国府犀東先生も、この祭事を賛せられた七絶（七言絶句）を賜つたりして、霞洞先生は祭墨の二文字を篆して、その下に犀東先生の詩を書かれた一幅（写真左上に見える掛軸）を下さつて、前途を祝福されご健在の時には両先生ともご列席の榮を得ていた。この軸は戦火を免がれて、いまま祭壇の中心に掲げ、全会員が心に励みを誓い文運の隆んならんこと念じているのである。

話は半分古いけれど、わが貞香会の所期するものを、歴然と標榜するこの二字こそは、本会の本誌の名としてふさわしいものではあるまいか。

前進また前進、これを機にいいよご精励を希つてやまな次第である。

〔祭墨〕昭和四十八年九月



祭墨会〈伝通院にて 昭和29年1月〉